

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530853

研究課題名(和文) 被虐待児童の里親養育に関する臨床心理学的実践研究

研究課題名(英文) Clinical Psychological Study on Rearing of Abused Children by Foster Parents

研究代表者

堀田 香織 (HOTTA, Kaori)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：10251430

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、里子のもとに、治療的家庭教師や話し相手、遊び相手として大学生を派遣するとともに、里親に聴き取り調査を行ったものである。里親家庭では、家庭内のルールや家庭外の問題行動をめぐる葛藤が生じており、時に限界設定が必要となった。そして、里子が「家族」としての所属感を獲得することが、転機につながった。派遣学生にとっては、学習支援の工夫、児童期の里子からの過度な要求や支配への対応、思春期の里子との心理的距離の調節、規範意識の共有、里子による無力化への対応が検討課題となった。そして、こうした里子の行動について、学生がその意味を理解することの重要性が確認された。

研究成果の概要(英文)：In this study, university students were dispatched to serve as therapeutic tutors, companions and playmates of foster children and the author conducted semi-structured interviews with their foster parents. In foster families, conflicts arise from the family's internal rules and problematic behavior outside the family, making it sometimes necessary to set limits. Against this background, the foster child's acquisition of a sense of belonging as part of the family became a turning point.

The dispatched students struggled to respond to the requirements and dominating tendencies of the younger foster children, to regulate their psychological distance with the adolescent foster children, to share normative consciousness, and to cope with the children's attempts to disempower them. Through this interaction, the importance of students understanding the meaning and background of foster children's behavior was recognized.

研究分野：臨床心理学

キーワード：里親養育 虐待 里子支援 学生派遣 家庭訪問

1. 研究開始当初の背景

近年我が国では虐待件数の増加とともに社会的養護を必要とする子どもの数が増えている。我が国では、社会養護の中で里親に委託される子どもは約 10%に過ぎず、他の約 90%は児童養護施設などの施設に措置されている(図 1)。養育者の永続した一貫性を重視し、また経済的理由からも、施設を縮小し、里親制度を重用してきた諸外国(欧米、オセアニア諸国)と比べると(庄司 2010)、里親委託の割合が少ないことが我が国の顕著な特徴となっている(湯沢 2004)。

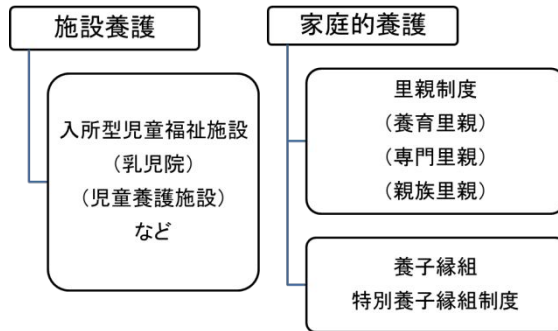


図 1

そうした中で、我が国における里親養育の充実が子どもの福祉にとって喫緊の課題となっているが、林(2010)は里親養護が拡大しない理由に里親の数の圧倒的な不足を挙げ、その背景として里親支援を行う社会体制の不備があると指摘している。社会的養護のこうした問題について、深谷ら(2013)は養育里親を対象としたアンケート調査等から、里親の抱える課題を明らかにし、指導相談所に専門の里親相談窓口を設ける等、里親への社会的支援を提言している。また、岩崎(2010)は、レスパイトケア(緊急避難)の調整、里親家庭に対する訪問活動や養育相談、里親会・里親サロンの運営などの早急な充実を求めている。また菅原(2010)は里親メンターによる里親家庭訪問による里親養育支援の試みを行い、その有効性を示している。家庭訪問による里親家庭支援として、堀田(2008,09,10)は学生を里親家庭に派遣し、里子の学習支援や遊び相手になる活動を報告している。被虐待児童であることを理解したうえで、学力向上をサポートする、あるいは、里子の心理的発達を援助するというのが主なニーズであった。そして派遣要請のある多くの里子が、学力の遅れ、逸脱行動などの問題を抱えており、里子との信頼関係形成の困難さ、里親の葛藤が浮かび上がった。本研究は、こうした学生派遣による里親家庭支援を展開し、里親家庭サポートシステムの構築を試みたものである。

さて、被虐待児童である里子と里親との関係形成に関しては、インタビュー調査や追跡調査が行われ(森本・野澤 2006、江崎 2009、御園生 2009、安藤 2010)、里親と里子の間にもどのような葛藤が生まれ、どのようにそれを乗り越えていくかが考察されている。また、

従来、愛着の形成という観点から論じられてきたが、金井(2012)は愛着理論を紹介しながらも、愛着理論の誤った理解が「無制限の受容」や「稚拙な依存パターンの許容」につながることに警鐘をならしている。また、内海(2012)は里子と里親との愛着関係形成上、従来注目されていた「試し行動」という言葉がもたらした影響を批判的に検討し、愛情を試されていると考えて困った行動を受け止めなければならないと苦闘するよりも、困った行動が生じにくい工夫をしつつ、うまくやれる自己概念を形作っていくことの重要性を訴えた。また、久保田(2014)は里親養育における愛着の再掲性について、主養育者との愛着関係のみならず、数人の代替養育者(祖父母、保母、ケアワーカー、セラピストなど)による愛着ネットワークの重要性を示した。

このように里親と里子との関係形成について研究が積み重ねられているが、本研究では、里親との愛着関係を基盤に、愛着のネットワークをさらに広げ、派遣された学生と里子との関係形成上の困難と、それを乗り越えるプロセスについて考察を試みる。

2. 研究の目的

本研究は治療的家庭教師、話し相手、遊び相手としての学生派遣による里親家庭サポートシステムの構築とともに、里親家庭における里子の心理的成長とそこでの重要な関わりのプロセスを明らかにすることを目的としたものである。主に問題行動が表面化し里親が対処に困りやすい、学齢期から思春期の里子とその里母・里父を対象とした。

3. 研究の方法

児童相談所との連携のもとに、里親家庭に協力を呼びかけ、協力が得られたのは、以下の里親家庭(里親ホーム)である。

小学校 2 年女子の里子 A と実子がなく、養子縁組を視野に入れている父母

小学校 6 年女子の里子 B と、病気を抱える実子を養育してきた里父母。養子縁組を視野に入れている。

高校生 1 年女子の里子 C と、母子家庭で実子を養育し、実子成人後里子の養育を始めた里母

小学校 6 年男子 D、中学校 2 年男子 E、中学校 3 年男子 F、高校 2 年女子 G、高校 3 年女子 H と里親ホーム代表の里父。このホームでは、2 年目から幼児女子 I と、小学校 5 年女子 J が支援対象として加わっている。

担当する学生は、子どもとの信頼関係を築くために、1 対 1 で固定した。里親家庭からの電話申し込み時点での情報と学生からの希望により、担当候補の学生を決め、筆者と学生とで初回の家庭訪問を行い、学生との顔合わせ、里親さんからの聴き取りを行った。そして派遣の頻度などを決定し、2 回目からは学生のみで訪問した。ほとんどの学生が心

理的問題を抱える児童を支援する活動に参加しており、そこでのミーティングが事前の研修として機能していた。家庭訪問の支援内容は、里子のニーズに応じて、学習支援から話し相手、遊び相手までさまざまであった。学生は、毎回フィールドノーツを記述し、毎週のミーティングで里子との関わりについて検討した。学生のフィールドノーツ、ミーティングの記録、そして里親インタビューの記録を分析対象とした。

4. 研究成果

(1) 里親家庭での里子の成長

今回の支援対象となった里子たちは概ね心理的健康度の高い里子たちであったが、児童期までの里子たちの中には強い不安や癩癩、吃音、爪噛み、身体症状を抱えている子どもたちもあり、思春期の里子たちの中には規範意識の低さ、不登校、登校渋りなどの学校不適応、起床時間の遅れなどの生活リズムの乱れ、帰宅時間の遅さや金銭の無駄使いなどの生活上のルール違反、自室を片づけられないなどの問題が見られる場合があった。しかしこのプロジェクトの期間、里親家庭での愛着関係や信頼関係の形成とともに、子どもたちは成長を遂げ、多くの問題行動が消失した。最年少の幼児期女兒Jの成長は顕著で、プロジェクト開始当時、見知らぬ大人に対する過度な緊張と不安が見られ、里父から離れることができなかったが、里父との愛着関係の確立とともに、落ち着きと成長が見られ、学生派遣が導入されると、学生との間でも関係を形成するにいった。

また、里子が里親家庭の「家族」であるという所属感を得たり（小学2年女子Aと里父母、小学6年女子Bと里父母）里親家庭を「居場所」と感じられたりする（高校1年女子Cと里母）ことが重要な転機となっていた。里子は里親家庭に引き取られることで、「家族」としての所属感を自動的に得られるわけではない。愛着関係や信頼関係の構築の中で、里子の持って生まれた性格を肯定的に受け入れ、養子縁組を視野に入れている里親が養子縁組への決意を固めていく中で、里子が「家族」という所属感を形成していった。また里親ホームでは、実親の元にもどるのではなく、里親ホームを居場所と感じ定めることができることで、落ち着きと成長が実現することも見いだされた（小学6年男子Dと里父）。また、それらに揺らぎが生じると、問題発生につながるが見取られた。

さらに、新しい里子の参入が家族システムを変化させ、当該里子と里親との関係を好転させる場合も見られた。新しい里子が参入することで、より以前から暮らしていた当該里子が里親をサポートしたり、新しい里子と里親とをつなぐ役割を担い、そのことで里親が里子を信頼したり、里子が里親から頼りにされることを実感することで新たな関係が構築されたと考えられる（新たに10代の姉

妹を迎え入れた里親家庭の高校女子C、乳児と小学生を短期で迎え入れた里親家庭の小学生女子A）。

里親家庭での葛藤

里親家庭内の葛藤としては、家庭内ルールをめぐる葛藤と学校不適応への対応をめぐる葛藤があった（高校生女子C他）。家庭内のルールをめぐるのは、たとえば、片付け、暖房機器の使い方、金銭の使い方、ITツールの使い方などをめぐり、里親と里子の間で繰り広げられる葛藤が見られ、双方にとっての大きなストレスにもなっている場合が見られた。また学校不適応については、教師への暴言、他人の自転車の持ち帰り、無断早退、学校での孤立、登校渋り、不登校などめぐる里親と里子との葛藤も見られた。こうした場合児童相談所の支援も入り、さらに深刻な場合には、「これ以上このルールを破るならば里親家庭にはいられない」という限界を提示することになり、それを枠組みとして、里親家庭を居場所と定め、問題行動が消失した場合があった（高校女子C）。

(2) 学生の家庭訪問による里子支援

本プロジェクトでは、里親との愛着関係を定着させた里子が、その関係をさらに広げ、学生との間で新たな1対1の関係を構築していくために、担当制をとって学生派遣を行った。里子たちの多くが、1対1で関わってもらうことを切望しているが、忙しい日常生活、学校生活において、1対1で密に関わってもらう時間が多く確保されているわけではない。そうした中で、1対1の関わりが持てたことは里子にとっても意味があったと思う。特に同世代の子どもとのコミュニケーションが難しく孤立しやすい場合、発達障害を有する場合などには特に貴重な体験であったと思う。また、また、病弱な里母との関係形成が困難だった里子にとっては、女子学生が訪問することで女性モデルの提供にもなった。一方で、派遣学生は里子を支援するうえで、様々な困難（学習支援の工夫、児童期の里子からの過度な「要求」「支配」への対応、思春期の里子との「心理的距離の調節」「規範意識の共有」「無力化」をめぐる困難、里親との関係をめぐる課題）にぶつかり、それらは大学でのミーティングにおける討論のテーマとなった。

学習支援の工夫

学習支援を行っていくうえでは、どうしたら里子たちがモチベーションを保てるか、集中を持続できるかに苦慮し、学生たちは工夫を続けた。里子たちの勉強を止めて遊びたい気持ちを受け止めながらも、枠を決めて勉強に向かうこと促してきた（小学6年男子D、中学1年E他）。こうした困難は里子特有のものではないが、里子の中には幼いころからの学習態度が身につけていなかったり、努力してもどうせできないと「無力感」を身に付

けてしまったりしている里子があり、そうした場合に、学習援助を通して、成績の向上以上に、達成感や自身の獲得といった意味が大きかったと考えられる。また、学習をめぐる里子と里親間で葛藤が生じやすく、そこに第3者としての学生が介入することで、里親里子間のストレスを軽減する意味合いもあった（小学2年女子A）。

受験期の子どもたち（高校生女子H、高校生女子G、中学生男子F）は不安や焦りを感じる時期があり、学生はそれを受け止めることに努めた。また、彼らとの間で将来の進路の話をする事など、学生ならではの関わりが生まれた。

児童期の里子の過度な「要求」と「支配」への対応

児童期の里子と学生が付き合っていくうえで課題となったのは、里子からの過度な「要求」、「支配」にどのように対応するかであった。例えば、里子は、自動販売機で物を買ってもらいたがったり、スマホを借りてゲームをしたがったり（小学2年女子A）、勉強せずに遊びたがったり（小学2年女子A他）し、時にそれは執拗なものとなった。里子は、大人ではあるがまだ若い学生と遊ぶ中で、自分の要求をぶつけている。こうした場合の学生の迷いは少なく、そうした要求を呑むことが子どもを「受容」することにはならないと認識し、要求をしっかり拒絶することの重要性を知っていた。そこでの課題は、いかに明確に、端的に、かつ分かりやすい理由で拒絶するかということであった。そしてその要求を拒絶はしても、里子自身を拒絶するわけではなく、大切にしたいということが十分に伝わっていたように思う。

「支配」については、遊びの中で、執拗に学生をコントロールしようとしたり（小学4年女子I）自分が「ずる」をしてでも学生に勝とうとしたり（小学6年男子D、中学1年男子E）するなどの「支配」欲求が見られた。これについて、学生の迷いは大きかった。カンファレンスにおける学生の発言の中には、「他の友達との間ではしない方がいいことを、自分が許してしまってもいいのかわからないことはいけないと教えなければいけないのではないのか」「相手の気持ちを考えることを教えなければいけないのではないのか」という気持ちが現れていた一方で、「虐待を受けてきた子どもたちにはできるだけ優しく受け止めてあげた方がいいのではないのか」といった気持ちも生じ、その間で葛藤が生じていた。ミーティングで話し合う中で、例えば「ずる」に対しては、「ずる」を見過ごすことはしないが、かといって、それを頭ごなしに叱ったり禁止したりせずに、自分の気持ちを伝えることを学生は選んでいた。子どもが他者を支配しようとする事の中には、これまで大人の力によって左右されてきた子どもたちが、自分の力で大人を支配すること

で自分の効力感（万能感）を確認したいという意味があることを理解しながら、この葛藤を抱えていくことが重要であった。そして、こうした関わりを続けることで、これらの「ずる」が自然と消失するという経験を体験したことは、学生にとっても意味のあることであった。

また、児童期の里子と付き合っていくと、馬になってその上に自分が乗る遊びがエスカレートするなど、学生をねじ伏せて自らの「万能感」を確認するような言動が見られ（小学4年女子J）こうした場合の対応もカンファレンスで話し合われた。しかし多くの場合、学生たちはその意味を理解することで、里子たちの気持ちを受容しながら、関わり続けることができた。

思春期の里子との「心理的距離の調節」「規範意識の共有」「無力化」に関する困難

思春期の里子と付き合っていくうえで課題となったのは、「里子と学生の心理的距離の調節」、「里子と学生の規範意識の共有」「里子による学生の無力化」であった。

「心理的距離の調節」とは、里子との間で信頼関係を築いて心理的距離を縮めようとする力と、安易に分かれたいくない、自分の心に侵入されたくないという心理的距離を離そうとする里子の気持ちを大切に、心理的距離を無理に縮めまいとする力との調整である。例えば、時間延長を求めたり、悩みや面倒な出来事を抱えていることをかきまみせたりしながら、その内容は語らないとか、悩みを語るが、それ以上には踏み込まれたい姿勢を見せる（高校生女子C）といった行動が見られ、学生は里子との距離の取り方に苦慮しながら、里子に対して慎重に踏み込まない姿勢をとっていた。

「規範意識の共有」とは、里親家庭に迎えられる前に、規範意識が育っておらず、その発達段階で一般的に許容される規範がどのような基準のものであるかを体得していない場合に、大人から見れば逸脱していることでも、学生には許容してもらえるかどうかを里子が確認してきたときに、学生がそれを許容するかどうかを自ら判断し、里子とその規範意識（逸脱が許容される規範の基準についての意識）を共有する行為である。

例えば、危険かもしれないアルバイト、飲酒、異性とのつきあいなどに関しては、大人社会の規範を逸脱する可能性の高い行為を「内緒にして」と言いながら学生に打ち明けて、それにどのように反応するかを確認する（高校生女子G、高校生女子C）といった言動が見られた。こうした行動についても学生には迷いが生じ、本当に危険で止めなければならないこと、直ちに里親に伝えなければいけないこと、反対に、ある程度釘を刺しながらも許せることを判断することを迫られ、これは簡単な作業ではなかった。正しい規範を教えていく大人であるべきだという

気持ちと、若者ならではの「物分りの良さ」を備えた先輩でありたい気持ちとが相反していたと思われる。こうした際に、大学でのミーティングでの事例検討において、里親さんに伝えなければならないことと、伝えなくてもよいであろうこと、気持ちを受け止めながらも止めなければいけないことなどを確認した。ミーティングは、学生がこのような判断をする際に支える枠組みとして機能していた。

児童期、思春期を通して、もっとも学生が対応困難であったのは、「無力化」である。「無力化」とは、里子が学生の存在を無意味なものにしたり、あまり価値がないと学生に思わせたりするような動きである。例えば、友人関係を優先して学生との約束をキャンセルしたり(中学生女子B、高校生女子C)、訪問しても学生との時間中にラインやブログなどで里子が時間をとられたり(高校生女子C、中学生男子D)、あるいは疲れて寝てしまったり(中学生男子D)という事態に、学生は不安や無力感を抱いたり、訪問回数が減ってしまったりすることが生じた。子どもたちのアンビバレントな言動に向き合うことよりも、こうした子どもたちの回避的な言動にこそ学生は戸惑い、自分は必要とされていないのではないかと感じていた。そうした中でも定常状態を保ち、長期的に訪れることこそが、真に安定した関係を構築していくうえで大事なことと思われたが、今回のプロジェクトでは期間が短く難しかった。

里親との関係をめぐって

学生は家庭訪問という形をとったことで、より里子の日常生活に接近できた。同時に、里親との関わり、あるいは里親と里子と学生との3者関係が生じることとなった。里親との関わりが生じたことで、里親が里子と学生との仲立ちをしてくれたり、里子の様子が学生によく伝わるなどメリットがある一方で、里親が望む活動と、里子が望む活動が異なったり、学生が大切と考える関わりと、里親が大切と考える関わりが異なる場合があり、そうした場合に、学生が自らの動きについて迷いが生じた。例えば、体重の増えてきた里子に対して、里親は体重減もかねて、外遊びを希望し、しかし、里子は内遊びを希望すると言った場合(中学生女子B)、里親は片付けといったしつけをすることを希望し、しかし学生の側は片付けよりもまず信頼関係を構築したいと希望する(高校生女子C)といった場合であった。学生支援によって何を指すかという目標を里親との間で共有することの重要性が確認された。里親インタビューを定期的に行い、学生派遣のコーディネート機能の強化することが望まれる。

(3) まとめ

本研究では、里親家庭に学生を派遣し、治療的家庭教師や話し相手、遊び相手になると

いう活動を通して、学生と里子の中で生じた葛藤や関係性の困難や課題について考察を行った。これらは里子が里親との愛着を基盤に、愛着関係を広げ、愛着ネットワークを形成していく際、重要な視点であると考えられる。また、里親家庭支援について今後の課題となったのは、学生の定期的・長期的な訪問継続の確保、学生派遣コーディネートの機能の強化、活動内容についての里親との共通認識の形成、小学生から中学生への移行期における支援内容の変化への対応などであった。学生はこれらの活動を通して、里親家庭で育つ子どものみならず、子ども理解や子どもと向き合う姿勢について考える機会を得、こうした活動が学生にとっても意味ある活動であったと言えるだろう。

<引用文献>

- 安藤藍 2010 里親経験の意味付け：子どもの問題行動・子育ての悩みへの対処を通して 家庭研究年報 35号, 43-60.
- 岩崎美枝子 2010 里親支援を俯瞰するー里親支援とは、どうあれば良いのだろうか? 世界の児童と母性 Vol.69, 17-24.
- 内海新祐 2012 「試し行動」というとらえ方をめぐってー支援者としての観点から 里親と子ども Vol.7, 65-70.
- 江崎伸介 2009 里親の養育観に関する一考察：里母の心理的葛藤とソーシャルサポート形成の視点から 東京国際大学 臨床心理学研究 7号, 53-71.
- 御園生直美 2009 里親家庭で育った子どもの心理的プロセスの検討：里子Sの事例を通して 白百合女子大学 発達臨床センター紀要 12号, 57-65.
- 金井剛 2012 愛着理論を知る：歴史、基礎知識、里親養育との関連での功罪 里親と子ども Vol.7, 52-57.
- 久保田まり 2014 里親養育における愛着の再形成 代替養育者の相互補完性 里親と子ども Vol.9, 73-79.
- 庄司順一 2010 里親支援の今後の展望 世界の児童と母性 Vol.69, 9-12.
- 菅原範子 里親メンターによる里親家庭訪問 里子養育支援の取り組み 2010 世界の児童と母性 Vol.69, 50-54.
- 林浩康 里親委託の推進に向けて 2010 世界の児童と母性 Vol.69, 13-16.
- 深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇 社会的養護における里親問題への実証的研究：養育里親全国アンケート調査をもとに 2013 福村出版
- 堀田香織編著 2008 児童家庭支援サークルひるやすみ実践報告書 No.4, 1-65.
- 堀田香織編著 2009 児童家庭支援サークルひるやすみ実践報告書 No.5, 1-90.
- 堀田香織編著 2010 児童家庭支援サークルひるやすみ実践報告書 No.6, 1-48.
- 森本美絵、野澤正子 2006 里子Aの成長過程分析と社会的支援の必要性：里親家庭C

への掲示的インタビューを通して 社会福祉学 第47巻第1号, 32-45.

山口敬子 要養護児童のアタッチメント形成と里親委託制度 2007 福祉社会研究 第8号, 65-79.

湯沢雅彦 里親制度の国際比較 2004 ミネルヴァ書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

堀田香織編著、熊谷遙、小林紗枝、上野利恭、林秀敬、吉川貴英、岡本大輝、須江佳苗、池田奈保美、中田公留実、山本美希著 学生派遣による里親家庭支援2014年度～2015年2015 里親家庭支援実践報告書 2,1-134. 査読無

堀田香織、我が国の最近1年間における教育心理学研究の動向と展望：臨床心理学の研究動向と今後の課題、教育心理学年報(日本教育心理学会)2013 閲読有、第51集, 73-84. 閲読有

堀田香織、学生の家庭訪問による里親家庭支援：児童相談所と大学の連携の試み 2012 里親と子ども、Vol.7, 113-121. 査読無

6. 研究組織

(1)研究代表者

堀田香織 (HOTTA, Kaori)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：10251430